

令和5年度病害虫発生予察注意報第16号

令和6年1月30日
愛知県 県

作物名：野菜（キュウリ、イチゴ、トマト、ナス）

病害虫名：灰色かび病

1 発生地域 県内全域

2 発生程度 多い

3 注意報発表の根拠

(1) 1月下旬に県内ほ場（キュウリ8ほ場、イチゴ27ほ場、トマト14ほ場、ナス20ほ場）で調査を行った結果、

- ・キュウリの発病果率が1.50%（平年0.39%、前年0.25%）、発生ほ場率が37.5%（平年12.5%、前年12.5%）といずれも過去10年と比較して**最も高かった**。
- ・イチゴの発病果率が1.41%（平年0.55%、前年0.44%）、発生ほ場率が18.5%（平年14.9%、前年14.8%）といずれも過去10年と比較して**2番目に高かった**。
- ・トマトの発病果率が0.43%（平年0.11%、前年0.29%）、発生ほ場率が14.3%（平年4.5%、前年14.3%）といずれも過去10年と比較して**2番目に高かった**。
- ・ナスの発病果率が0.15%（平年0.34%、前年0.05%）、発生ほ場率が5.0%（平年11.5%、前年5.0%）といずれも過去10年と比較して平年並であった。

(2) 1月25日名古屋地方気象台発表の1か月予報によれば、平年より晴れの日が少なく、日照時間は平年並か少ないと予想され、本病の発病に好適な条件が続く。

4 防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は傷口や枯死した部分から侵入する。花卉から侵入することが多いため、開花後のしぼんだ花卉を摘み取る。
- (2) 施設内が多湿になると発病が多くなるので、過剰なかん水を避け、換気を行う。
- (3) 愛知県において、QoI剤（FRACコード：11）、SDHI剤（FRACコード：7）に対する耐性菌の発生を確認している（ただし、作物やほ場により薬剤感受性は大きく異なる）。**薬剤防除は予防剤を中心に発病前から行う**。
- (4) 同系統の殺菌剤を連用すると、殺菌剤耐性菌の発生リスクが高まる。
特に本病は薬剤感受性の低下に関する報告が多く、耐性を獲得しやすい病原菌であり、耐性菌発生を防ぐため、FRACコード表を参照して、異なる作用の殺菌剤をローテーション散布する。
- (5) 被害果、被害葉は伝染源となるので、発見したら速やかにほ場外に持ち出し、適切に処分する。

表 キュウリ、イチゴ、トマト、ミニトマト、ナスの灰色かび病に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	使用方法	FRAC コード	キュウリ	イチゴ	トマト	ミニ トマト	ナス
ロブラール水和剤	収穫前日	散布	2	○	○	○	○	○
ロブラールくん煙剤	収穫前日	くん煙	2	○	○	○	○	○
セイビアーフロアブル20	収穫前日	散布	12	○	○	○	○	○
フルピカフロアブル	収穫前日	散布	9	○	○	○	○	○
ピクシオDF	収穫前日	散布	17	○		○	○	○
オーソサイド水和剤80	収穫前日	散布	M4			○		
ダコニール1000	収穫前日	散布	M5	○		○	○	○
ベルコートフロアブル	収穫前日	散布	M7	○	○	○	○	○
ダイヤモンド	収穫前日	散布	M7 17	○	○	○		○
ジャストミート顆粒水和剤	収穫前日	散布	12 17	○	○	○		○
ボトキラー水和剤	発病前～ 発病初期	ダクト内 投入	BM2					野菜類で登録あり

成分ごとの総使用回数に注意する。

FRAC コードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRAC コードの詳細は https://www.jcpa.or.jp/assets/file/labo/mechanism/code_pdf01_2023.pdf を参照する。

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

5 連絡先

愛知県農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除室

電話 0561-62-0085 (内線471)